

病
床
録

A4746
1



114
A 4746



治驗錄ハ小腿被雜骨傷ニ大腿ノ芽一期切斷術ヲ施シタルモノニシテ敢テ新奇ノ治驗ニアラサレト日本帝國ノ一大臣大隈伯ノ負傷ニシテ日本帝國ノ諸大家集テ以テ施シタル手術ナリ日本國已來未曾有ノ一環事タルヲ以テ記シテ永ク之ヲ紀念トス

日本赤十字社醫員高橋種紀記

○大隈伯病床日誌

前キ、外務大臣從二位勲一等伯爵大隈重信君ハ歲五十有二十リ明治廿二年十月十八日午后四時蕪町區霞町外務省門前ニ於テ爆裂彈丸ノ破裂ニ因テ右下腿ニ負傷セラレ其負傷ノ性タル右側下腿ノ複雜

日本赤十字社

骨傷ニシテ症状ヲ擧クレハ左ノ如シ
 右側下腿ノ前内側ニ於テ皮膚、軟肉及ヒ骨質共ニ毀
 損シ出血ヲ以テ被ハレタル部ニケ所アリ甲ハ下腿
 上端ノ脛骨側面ニアリ長サハ「セ」チノ「ト」ル幅三
 「セ」チノ「ト」ルノ不整長方形ノ創面ニシテ皮膚、筋
 肉及ヒ骨膜ヲ貫通シ脛骨ノ内關節部ノ骨質ヲ縱横
 微細ニ破碎シ延テ膝關節内ヲ損傷セリ乙ハ脛骨ノ
 内髁部ニ當リ長サ六「セ」チノ「ト」ル幅一「セ」チノ
 「ト」ルノ斜ノナル創口ニシテ皮膚、腱鞘、腱及ヒ骨膜
 ヲ毀損シ骨質ヲ破碎シテ足關節内ニ達セリ而シテ脛
 骨ハ上下兩端餘力ノ及フ所トナリ幹部ハ縱横ニ碎
 ケ皮下骨折ノ症アリ其他腓腸部三ケ所、膝蓋部ニ二
 ケ所、左側頸部ニ數ケ所ノ擦過創アリ然レモ此等ハ

僅ニ皮膚ノ剝離ニ止リ出血スルニ至ラス
 受傷ハ幸ニ脛骨動脈ヲ避ケテ小血管傷ケタルノミ
 ナルヲ以テ出血少ナカリシ殊ニ海軍々醫總監高木
 兼寛君ハ受傷后數分時ヲ出テズシテ病床ニ接セラ
 レ直ニ救急ノ處置ヲ施サレタルヲ以テ無用ノ血液
 ヲ失ハサリシハ實ニ受傷者ノ倖幸ナリ其他全身上
 ノ症状ハ外傷性ノ振盪、精神ノ感動及ヒ受傷部ノ劇
 シキ疼痛ト多ク血液ヲ失ヒタル等ニ依テ顔面蒼
 白ニシテ冷汗ヲ流シ脈搏細數ニシテ口渴等ノ症アリ
 リ依テ時々赤葡萄酒ヲ飲料トシ疼痛ニハ塩酸「モル
 ヒ子」水ヲ患部ニ注射ス而シテ受傷部ハ石炭酸水ヲ以
 テ洗滌シ固定繃帶ヲ施シ茅二ノ處置ヲ俟テリ
 次ニ集會サレタル醫士諸君ニハ陸軍々醫總監醫學

博士橋本綱常君、海軍々醫總監醫學博士高木兼寛君、
一等侍醫々學博士池田諒齋君、同伊東方成君、醫學博
士佐藤進君、醫科大學教師ドクトル、ベルツ君、醫學士
高階經本君等ナリ其他赤十字社病院ヨリ難波一君
小西功君及高橋種紀ナリ
治療ノ方針タル先ツ防衛ヲ嚴重ニシテ迷朦藥ヲ用
ヒ創口ヲ哆開シ負傷ノ淺深輕重ヲ實測シテ后チ若
シ受傷ノ度重キニ於テハ直ニ第一期切斷ヲ大腿下
三分一ニ施スベク又其度輕キニ於テハ切斷ヲ施サ
スレテ適當ノ處置ヲ施スベシトシ先ツ外科器械ハ
宮内省侍醫局ノ者ヲ用ヒ消毒材料ハ五十倍石炭酸
水、十倍昇汞水、沃度「ホルム、ガーセ」サルチル「酸綿」及ヒ
繃帶等ノ準備ヲ整頓シタリ

主任者ハ池田諒齋君ナリ同君ハ從來同家ノ囑托者
ナルヲ以テ乃チ此任ニ方リタルナリ外科的療法ハ
橋本、高木、佐藤ノ三君之ヲ掌リ佐藤君執刀ノ任ニ方
ル助手ハ高階、難波、小西ノ三君及ヒ高橋トス
午后七時五十分、コロ、ホルムノ吸入ヲ施シ麻痺ノ
應スルニ從テ固定繃帶ヲ撤去シエスマルヒ氏ノ驅
血帶ヲ足ノ末端ヨリ纏絡シテ大腿上三分一ニ至リ
之ヲ結縛シテ術中無用ノ出血ヲ豫防ス
受傷ノ度ヲ檢セシカ為メ創口ニ刀ヲ加ヒ深部ヲ實
視シタルニ現症ニ記スル如ク果メ重傷ナルヲ以テ
直ニ第一期切斷術ヲ行フニ決ス
大腿下三分一ノ處ニ於テ皮膚ヲ輪狀ニ切開シテ之
ヲ上方ニ反翻シ次テ筋肉ヲ切斷シ骨膜ニ達シ亦之

ヲ上方ニ及翻シ之ヨリ骨膜ヲ剥離シ骨質ヲ鋸断セ
リ此断創中ニ於テ股動脈深股動脈及ヒ二三ノ太キ
靜脈管ヲ結紮シ皮膚ト筋層ヲ共ニ縫合シ内外兩端
ニ排洩口ヲ備ヒ沃度ホルム、ガ―ゼヲ貼シ固定綑帶
ヲ施シテ直ニ病奪ニ就カシメ爰ニ於テ大腿上部ノ
驅血帶ノ結縛ヲ除去シ尚砂枕ヲ以テ患腿ヲ固定シ
テ術全ク終ル

驅血帶ノ用方タル千八百八十八年エスマルヒ氏
驅血帶改良法ニ從フテ行ヒタル者ニメ即チ二三
ノ至ナル血脈管ヲ結紮スルノミ直ニ縫合ヲナシ
固定綑帶ヲ施シ病奪ニ就カシメ茲ニ始メテ中樞
部ノ結縛ヲ去ルモノニメウエルフレル氏ノ説ニ
ニ從ヘハ其ノ利益タル從前ノ方法ニ比スレハ專

一手術速ニメ毫モ血液ヲ失フヲ無ク專ニ創面ヨ
リ吸収スル有害毒ヲ防クト云フニアリ
術后ノ状ハ脈搏八十六体温三十七度七分ニシテ外
傷及ヒ手術ノ振盪アリテ僅ニ不安ノ状ヲ呈ハレ顔
面蒼白、四肢微冷、煩渴引飲シ水様液ヲ吐スルヲ二三
回又タ頻リニ疼痛ヲ感セラル尿意アレハ閉塞シテ
自利スル能ハス依テ導尿管ヲ用ヒテ五〇〇、〇尿ヲ
洩スヲ得タリ于時午后十一時ヲ報ス
午前二時頃俄然四肢厥冷、顔面冷汗ヲ流シ脈細數ト
ナリ大ニ不安ノ状ヲ呈セラル乃チ四肢ヲ温菴シ武
蘭酒ヲ内服セシメタルニ脈力漸次ヲ得テ四肢温暖
ニ復ス然レモ當夜ハ半睡半醒ニシテ稍煩悶ノ状ア
リ莫ニ安眠ヲ得ルニ至タラス

術后第一週間ハ漸次日ヲ追フテ軽快ノ状アルモ大同小異ニ一日快ヲ得レハ一日重キヲ覺フカ如ク
症状一定スルニ至ラズ体温ハ三十七度八分乃至三十六度九分内ヲ昇降シ脉搏ハ百十至乃至六十八至ノ間ヲ上下シテ甚タ不定ナリシ振盪症状ハ日一日ヨリ消散シテ此週ノ終リニ至リテハ全ク之ヲ見サ
ルニ至ル疼痛ハ第四日ニ至テ殆ント消散ス然レモ時々繃帶ノ窘迫ヲ訴フ滋養品ハ一週ノ全量牛乳千瓦「スーヴ」千四百十瓦鶏卵十個ニシテ一日平均牛乳百四三瓦「スーヴ」二〇二瓦ニ當ル其他米粥、鳥肉、野菜等少許ヲ食セラル、モ其量最モ少シ尿閉ハ依然トシテ存在シ漏ス処ノ全量五五三〇瓦大便四回浚腸ニ因テ通ス而シテ此週間ハ亦タ薄ニ慣レス身体諸部

ニ疼痛倦怠或ハ違和ヲ訴ヘ時々魔夢襲ハレ真ニ安眠スルヲ難シ為ニ大ニ身体衰弱ヲ呈ハレ亦タ神思爽快ヲ覺ヒサリシ
第一回ノ繃帶交換ハ全一週日ニシテ之ヲ行ヒタリ
二臺ノ蒸氣「スプレ」ヲ装置シ百倍石炭酸水ノ蒸氣ヲ以テ室内ノ塵埃ヲ沈底シ繃帶ヲ徹去シ断頭ヲ検スルニ縫合接面ハ稍癒合様ヲ營ムモ僅ニ炎症ヲ起シ皮膚緊張シテ縫合糸陥没スルヲ以テ全ク縫合糸ヲ除去セリ亦タ創面ヨリノ排泄ヲ起サス創内ノ「カ」一セ固着スルヲ以テ強テ之ヲ去ラス創邊ノ不潔ヲ去リ護謨絆創膏ヲ貼シ創面ノ曝露ヲ防キ故ノ如ク繃帶ヲ行フ
第二週間ノ経過ハ始終著シキ變化無ク前週ニ及シ

テ諸症候漸次軽快シ体温脉搏ノ對稱ヲ得ルニ至リ
食欲稍増進シ尿量亦々増加ス体温三十六度六分乃
至三十八度二分内ヲ昇降シ脉六十搏乃至八十六搏
内ヲ上下ス夜中稍安眠ヲ得テ翌朝ニ至テ神思爽快
ヲ覺フ此週ニ於テハ二回ノ崩帶交換ヲナス創面ハ
生肉腐肉ノ分界ヲ起シ排泌液漸次増加シテ崩帶ヲ
浸ス一多シ滋養品ハ牛乳ノ全量千七百九十五瓦「ス
ープ」二千三百六十五瓦、鶏卵八個、他ニ米粥、麦飯、鳥
肉、豆腐、野菜等ノ少許ヲ食セラレ尿量六千瓦大便二
回ナルモ最モ少量ニシテ秘結ノ傾キアリ
此週ノ終リニ當テ原因不明ナル体温昇騰アリ即術
后第十四日午後一時俄然惡寒、戰慄、發熱三十九度一
分ニ達シ脉搏八十至トナリ神思全揚ノ状ヲ呈ハス

然レ此僅ニ二三時間ニシテ午後六時ニ至テハ三十
六度七分ニ下降ス翌十五日ニ至テハ諸症常ニ復ス
但シ此週ニ於テハ非常ニ便秘シテ通常ノ浚腸ニ因
テ便通ヲ得ス以テ二〇、〇ノ「カル」ス泉ヲ内服セシ
メテ少量ノ宿便ヲ得后々大ニ輕快ヲ覺ヒラル
事三週間ニ至テハ諸症増々輕快体温ハ三十六度六
分乃至三十七度八分内ヲ昇降シ脉ハ六十四搏乃至
七十八搏内ヲ上下ス創面ハ僅ニ外側ニ腐肉片ヲ殘
スノニ他ハ良性肉芽ヲ生シ排泌前週ヨリ減マリ食
欲大ニ増進シ身体ノ疲勞快復ノ状アリ牛乳二千八
百五十瓦「スープ」三千五百四十瓦、鶏卵八個、他鳥肉
及ヒ飯、豆腐等ヲ食セラレ尿量七千〇六十瓦、大便三
回ニシテ少量ヲ通ス

芽四週間ニ至テハ前週ニ比スレハ飲食物大ニ増量
セラレ食棧常ニ復シ神思爽快夜中安眠ヲ得ルヲ多
シ小便ハ自利シ其量又タ増加セリ大便ハ隔日浣腸
ニ由テ通ス創面ハ全ク良性肉芽ヲ以テ被ハレ漸次
癒合期ヲ營ンテ周圍ヨリ新生ノ肉芽ヲ發ス
芽五六週間ハ前週ノ症状ヲ以テ経過シ漸次佳徵ヲ
呈スルノミ此週ノ終ニ當テ當直醫ヲ廢ス
芽七週八週ニ至テハ創面一錢銅貨大トナリ全身浴
ヲ行ヒ硝酸銀百弗彼兒撒母軟膏ヲ貼ス此週ノ終ニ
至テハ未容ニ接シ官邸ヲ去テ私邸ニ移ラル
芽九及十週ニ至テハ創口殆ント癒痕ヲ以テ被ハル
僅ニ中心一点ノ肉芽ヲ殘ス此週ノ終ニ至リテ斷頭
浮腫ヲ呈シ外側ノ一部ニ腫脹疼痛ヲ起シ皮膚ノ一

部暗赤色ニ變シ波動ヲ感ス而シテ癒痕ノ外端ニ一小
瘻孔ヲ生シ稀汁ヲ洩セリ依テ縱徑ニ「ツオル」ノ切開
ヲ加ヒ腓膜顔廢ノ多量ヲ出セリ此創面ハ二週間ニ
シテ全ク癒合ス
芽十一、十二週ノ終ニ至テ斷頭ハ癒痕ヲ被ヒリ内端
部ニ一小瘻孔ヲ殘スノミ但シ斷腿ノ浮腫未タ去ラ
ス時々増減アリ且ツ夜間屢々安眠ヲ害セリ依テ毎
日温浴后ニ按摩法ヲ行フル未浮腫漸次消退ス
芽十三、十四週ニ至テハ按摩法ニ因テ漸次斷腿ノ浮
腫消散シ安眠ヲ妨ケサルニ至ル
芽十五週ニ至テ斷頭ノ瘻口ヨリ結紮糸ヲ出シテ瘻
口全ク癒ユ然レモ未タ外側ニ一ノ硬結ヲ殘セリ故
ニ續テ温浴后ノ按摩法ヲ施行シタリ

左ノ表ハ、脉搏、体温、滋養物、尿量等ヲ標示シタル者ナリ

第一週	体温 37.4	脉搏 89	一週全量 一日平均 朝食 夕
第二週	体温 37.4	脉搏 70	
第三週	体温 37.4	脉搏 71	
第四週	体温 37.4	脉搏 70.5	
第五週	体温 36.6	脉搏 70	
○第一週	牛乳 1000	曾布 1400	一週全量 一二乃至三四
第二週	牛乳 1795	曾布 2865	
第三週	牛乳 2850	曾布 3540	
第四週	牛乳 2710	曾布 4680	
第五週	牛乳 2260	曾布 4440	

第六週 牛乳 2750.

曾布 5750.

○ 第一週 尿量 5530.

第二週 尿量 5200.

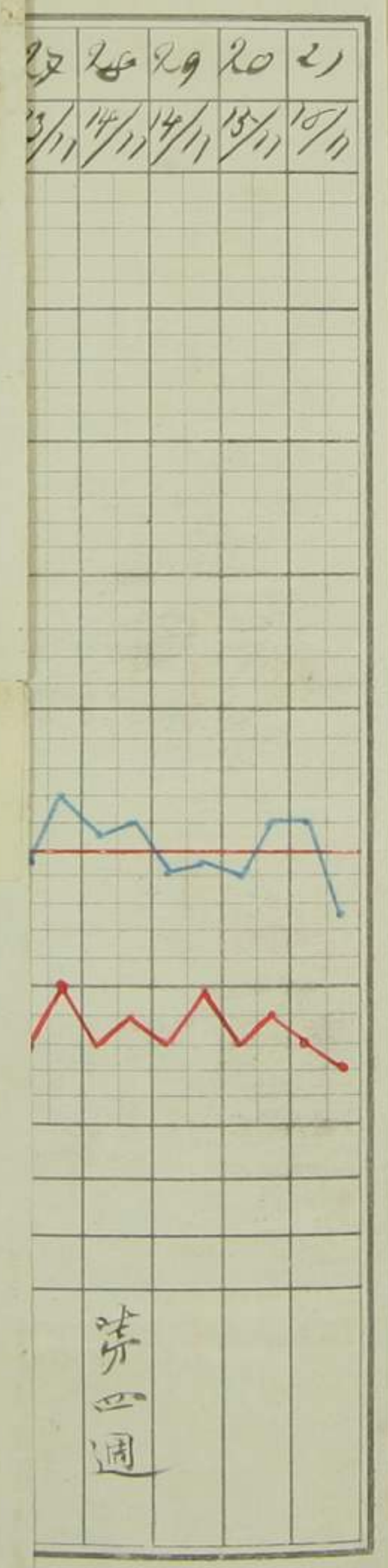
第三週 尿量 7050.

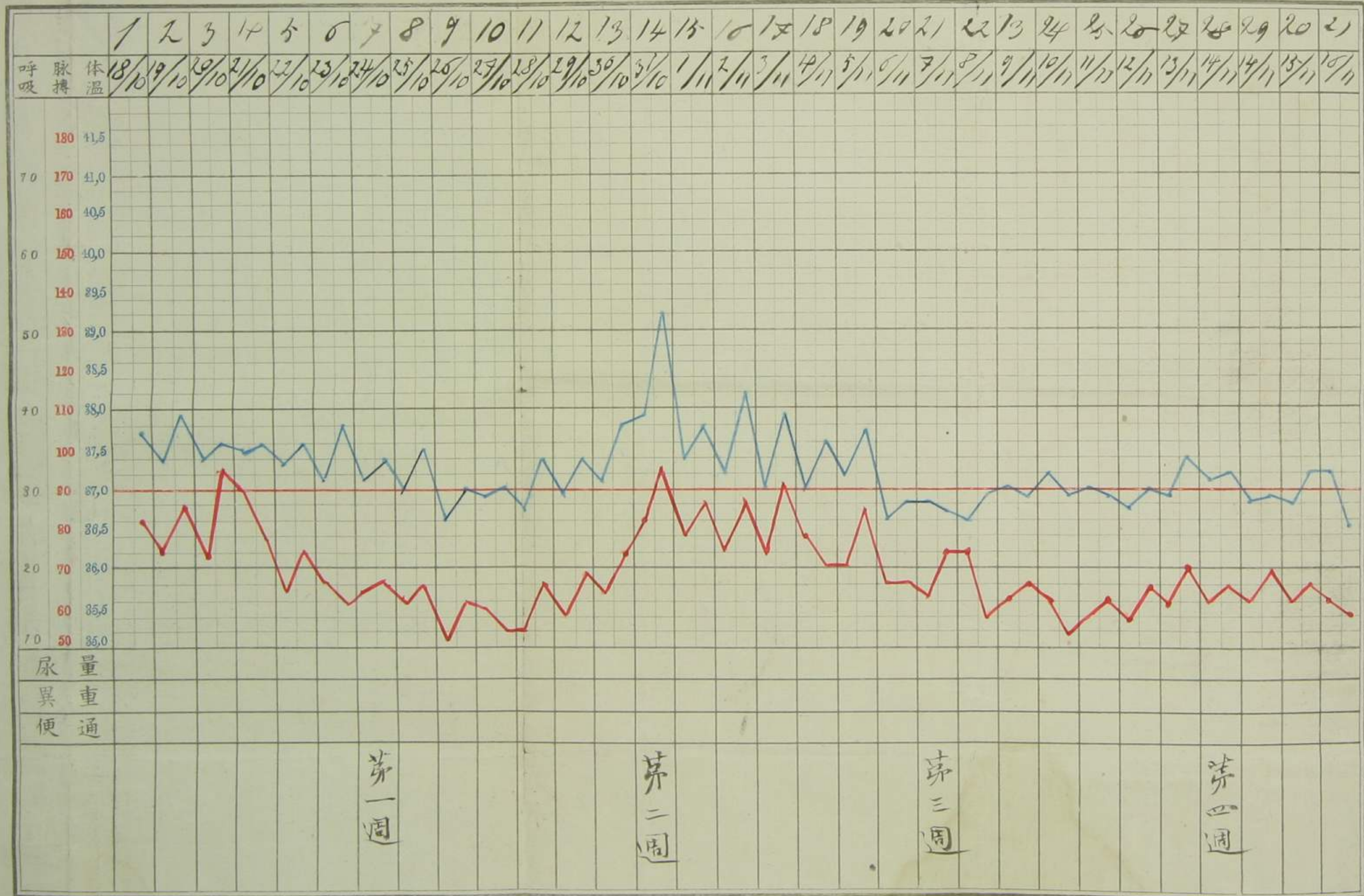
第四週 尿量 70700.

第五週 尿量 8850.

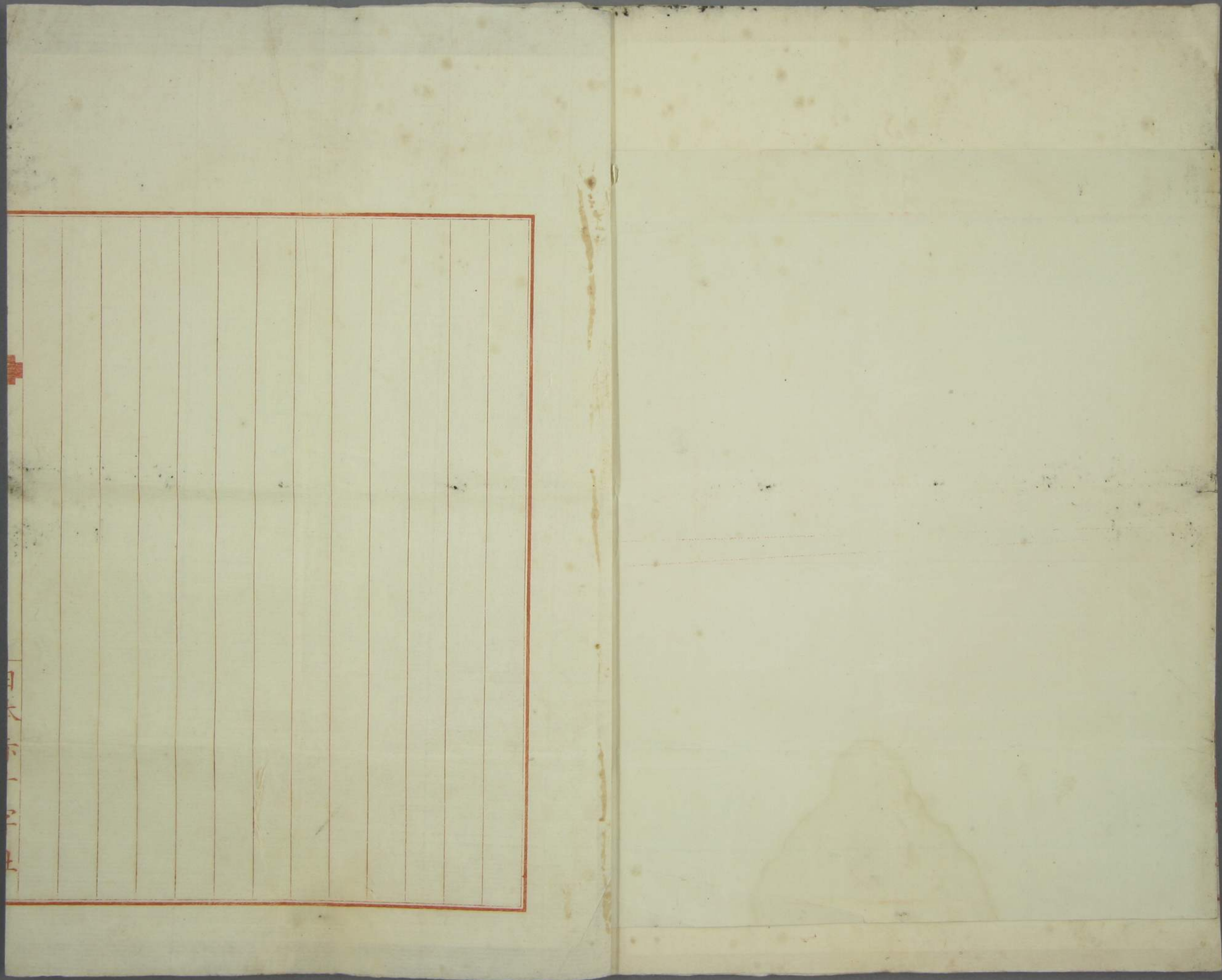
第六週 尿量 7250.

但シ尿ノ検査ハ一週間一回ツ々行ハタリ其琥珀色ニシテ稍々濁アルアリ或ハ透明ナルアリ酸性ニシテ蛋白質分糖分含有スルヲ無シ異重ハ千〇二十三乃至千〇二十六内外ニアリ





第二週尿量 5200、
 第三週尿量 7080、
 第四週尿量 70700、
 第五週尿量 8850、
 第六週尿量 7250、
 但シ尿ノ検査ハ一週間一回ツ々行ヘタリ其琥珀
 色ニシテ稍々濁アルアリ或ハ透明ナルアリ
 酸性ニシテ蛋白分糖分等含有スルヲ無シ異
 重ハ千〇二十三乃至千〇二十六内外ニアリ



日
之
記
一
冊

日本書紀